



# よみがえる グリーンライン

～「グリーンラインの犬達」からの手紙～



グリーンラインを愛する会  
理事長 丸山 孝志

寄せられた投書

ある日、私の元に一通の封筒が届きました。封筒の裏には可愛い犬たちの写真が…そして差出人の名前は「グリーンラインの犬達より」…。

(本文要約)

中国新聞を読みました。「グリーンラインはゴミと野犬と暴走族のたまり場」とお話ししされていましたが、野犬は元はと言えば昨日まで一緒に散歩したり餌をくれた飼い主に、突然背を向かれてしまった飼い犬なのです。

昨年NHKで話題になったグリーンラインの“つくし”的こと、ご存じでいらっしゃいますか？劇薬のようなものをかけられ、焼けただれ、あちこちの皮膚がえぐられ、赤い身が出て、両目にもその液が入り、光も見えない状態でした。そのうえお尻には針金がつっこまれていました。寒くて、暗い山の中、抵抗もできず、怯えて…。捨てられるために、虐待されるために、生まれてきたわけじゃないですよね。

社会システムの中でもっとも弱い立場にある動物への虐待行為は、生命軽視の源であり、凶悪犯罪の増加などに代表される、現在の福山の心の荒廃へと繋がっているのではないかでしょうか？

(中略)

犬をなくしても、私にはきれいなグリーンラインには思えません。人間さえよければいいと言う考えにしか思えません！

どうかグリーンラインの犬たちの命を奪うことだけはなさらないでください。目の前の犬たちがいなくなったら、解決したとは言えません！

どうか丸山様にグリーンラインの犬たちのSOSが届きますように！」

(後略)

私は何度も涙を拭いながらこの手紙を読みました。しかし、私はグリーンラインの犬達の置かれている状況が「かわいそう」等という言葉では

すまされないことを知っていました。この手紙を書かれた方の気持ちに同感しながらも、

私はわき上がる怒りを抑えきれませんでした。

その怒りは命あるものを無造作に捨てて省みない、人とも言えない人々への怒りだけではなく、「犬を殺すな」「保護して生かす事は出来ないのか？」「犬を捨てない、命を大切にする事を訴えるべきだ」そのような発言をしながら、自分では具体的には何もしようしない人々への怒りでもありました。勿論それらはいずれも正論です。しかしその正論は、今現在も捨てられ続け、恐怖と不安に怯え、飢えに苦しみ、病気で苦しみ、野犬やカラスに脅かされ、車にはねられ、傷つき、死んで行くグリーンラインの犬達には何の救いにもならないのです！

そして…私もまた、そのような犬達に死を与える以外に何も出来ない、無力な人間なのです。

そんな自分に対しても、やり場のない怒りと無力感を感じていました。「所詮人間の出来る事などたかが知れているのだ。お前の安っぽい道徳心だか良心だか、正義感だか使命感だか…そんなものが何になる！」

私はグリーンラインを愛する会を立ち上げたこと、そして「グリーンラインの環境の改善と活性化」等という、途方もない夢を抱いてしまったことを後悔していました。

「これではまるでドンキホーテだ…相手は風車どころじゃない…」私は打ちのめされました。まだ1年もたたないと言うのに…。

